

平成 2 6 年 5 月 2 7 日現在

機関番号：34304

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652092

研究課題名（和文）口語音声資料を用いた中国語の変調と軽読の発生メカニズムに関する形態音韻論研究

研究課題名（英文）Morphophonological Study on the Mechanism of Tone Sandhi and Neutral Tone Appeared in the Sound Corpora of Spoken Chinese

研究代表者

中川 千枝子（NAKAGAWA, Chieko）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：20172273

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円、（間接経費） 450,000 円

研究成果の概要（和文）：北京語の連続音の中で頻繁に発生している声調変化（変調と軽読）の実態について、DVD版北京語テレビドラマ等から入手したデータを基にして、数表現における接辞添加を中心に調査と分析をすすめた。数の3カテゴリー（基数、序数、個数）の形式が、声調変化と係わる接辞の種類の形態音韻論に支えられて存在している事実を指摘した。これまで構築してきた北京語の口語音声資料のデータベースを利用して、最近20年間の呼称語の変容実態についてデータ分析をすすめた。

研究成果の概要（英文）： Tone sandhi and neutral tone which are two typical types of tone variation occur frequently in the speech of Pekingese. Our previous studies revealed that a part of tone sandhi and neutral tone are motivated by the addition of affix at the level of morphology. This morphophonological study concentrates on the relationship between the addition of affix and these two types of tone variation focusing upon the three categories of number expressions (cardinal number, ordinal number and countable nouns number). The corpora of Pekingese TV dramas provided us with data that what kinds of affix cause tone sandhi and neutral tone about three categories of number expressions.

In addition, we conducted a survey into the change of vocative expressions recent twenty years making use of the same corpora of Pekingese TV dramas.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国語 言語学 音声学 形態音韻論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 北京語の連続音の中で発生する変調や軽読は、漢字資料からは読み取れない音声変化である。口語音声資料に基づいた基礎データが乏しく、本研究では DVD 版北京語テレビドラマから入手したデータを基に、変調と軽読の発生メカニズムを形態音韻論の手法で解明する。

(2) 中国語学の先行研究の中で、接辞を接頭辞、接尾辞、接中辞に分類して形態論の視点で記述したのは CHAO, Yuen Ren 1968 *A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE* が最初である。接辞の添加を、音声変化である変調や軽読と結びつけて総合的に考察した試みは寡聞にして知らない。軽声(北京大学中国語文学系現代漢語教研室編《現代漢語》1993,2004 では軽音と呼ぶ)に読むべき各種成分の一つとして、名詞の後につく一部の接尾辞が取り上げられてきたに過ぎない。

(3) 申請者はこの 10 年間、中国語の語彙的軽声を継続的に研究してきた。その過程で、接辞の添加が変調および軽読と密接に連結していることを認識した。

## 2. 研究の目的

(1) 接辞の添加が引き起こす声調変化(変調および軽読)は、接辞という形態のどのような機能の違いと結びついているのか。具体的には、英語などの印欧語族の言語に見られる接辞の添加には、屈折と派生の二つの異なる機能が認められるのに対して、中国語の接辞添加は、派生接辞のほかに屈折機能をもつ接辞が存在するのか。研究してみる価値はきわめて高い。

(2) さらに、軽読には二つの契機(重読音節が弱化して軽読になったものと、重読音節の基体に付加される軽読音節の接辞)があり、変調にも「韻律の変調」(第 3 声の連続にみられる変調)と「語彙項目の変調」(数詞“一”と不定詞“不”)の二つの契機がある。声調変化の発生契機の違いは、接辞の機能の違いと結び付きがあるのか否かを検証する。

(3) 接辞の添加が引き起こす変調と軽読の現象について、数表現における接辞添加を中心に調査と分析をすすめる。数の 3 カテゴリー(基数、序数、個数)の形成が、接辞の種類、変調現象を引き起こす接辞と引き起こさない接辞、軽読現象を伴う接辞と伴わない接辞などの形態音韻論に支えられて存在している事実を証明し、「中国語無形態変化」論に一石を投じることを目指す。

## 3. 研究の方法

### (1) 軽読に関する実態調査

北方方言の中の軽読がない山東方言と軽読がある河北方言や北京語との対比をす

め、語頭と語中に発生する変調と、語中と語末に発生する軽読の機能分担を分析する。

### (2) 接辞添加と声調変化

中国語の接辞は語彙項目が多く、種類も多岐にわたる。3 年間の目標は、数表現にあらわれる変調と軽読現象を対象にして、接辞添加との関係を調査分析する。数表現を 3 つのカテゴリー(基数、序数、個数)に分け、それぞれのカテゴリーの下に、接辞添加によって引き起こされる変調と軽読の発生契機を分析する。その上で数の 3 カテゴリーにおける接辞の文法的性質を考察する。

## 4. 研究成果

### (1) 主たる研究成果

数の数え方における接辞添加と生著変化

中国語は語の形式や構造からみた類型論では、孤立語の言語といわれ、言語学の入門書の中で「中国語やベトナム語では、語は原則として一音節から成り、二音節以上は複合語である。また屈折は見られない。」(田中晴美ほか『言語学演習』1982,1994, p84)といった紹介がなされることが少なくない。中国の学者にも「中国語無形態変化」論がある。しかし、本当にそうなのだろうか。声調言語である中国語は、一方で、文字言語としての漢字を持ち、音声と文字の乖離が甚だしい。このあたりの言語事情が、中国語を極端な単音節言語に類型化する要因であると思われる。実際の連続音の中では、中国語にも声調言語に固有の音声変化が発生しているが、漢字には音声変化情報を搭載するまでの潜在能力が備わっておらず、音声変化が感じで隠されてしまうのである。

本研究は、数のかぞえ方というどの言語にも共通する表現を対象に、基数と序数と個数の 3 カテゴリーを弁別する語形式として、接辞の添加があり、同時に声調変化をとめない、形態音韻論からの分析が有効であることを示した。例えば、数詞「一」を含む基数、序数、個数についてみると、以下の通りである。

基数では数詞“一”は第 1 声 yī でこれが基本である。序数の“第一課”「最初の課、第 1 課」と、個数の“頭一課”「最初の一課」にはともに接頭辞が付加されているが、序数の“一”は第 1 声 yī で変調せず、個数の“一”は第 2 声 yí に変調する。そのメカニズムは両者の構造の違いにある。序数は左枝分かれ構造[“第一” + “課”]であり、末尾の数詞“一”は本来の第 1 声を保つ。個数は右枝分かれ構造[“頭” + “一課”]であり、量詞“課”第 4 声 kè の前で、数詞“一”は義務的に第 2 声に変調する。CHAO 1968, p218 には“頭一” is always bound, whereas “第一” is free. との記述があるが、数詞“一”の変調に関する言及がなく、両者の構造の違いには気づいておらず、序数の接頭辞“第”と、個数の接頭辞“頭”の対立を見逃している。さらに、序数の“第一”には、これを表わす

専用の付属形式“首”があり、[“首”+量詞]の形をとり、あたかも数詞ように振る舞う。例えば“第一次”の3音節表現が、“首次”の2音節で表現される。

数字「2」を含む表現では、接頭辞の添加のほかに、数詞「2」の語形の違いとなっており、あらわれる。基数は数詞“二”er4を用いる。序数の“第二課”「二番目の課、第2課」では基数と同じ数詞“二”er4を用いるが、個数の“頭兩課”「最初の二課」では数詞“兩”liang3を用いる。

数字「1」を含む序数は、接尾辞の前に位置しても変調しない。背番号一番や日付の「ついたち」をあらわす“一号”では、序数を示す接尾辞“号”第4声 hao4 の前でも、本来の第1声のままである。

基数、序数、個数の3カテゴリーの内部では、接辞の添加があり、同時に声調変化をとらない、数詞の選択があり、語形変化が整然と機能しているのである。

以上の指摘については、一定の評価が得られている。

#### 北京語呼称語の変化

これまで構築してきた口語音声資料のデータベースを活用して、呼称語の使用について統計調査を実施した。その成果は、修士論文(呉 昊 ゴコウ『最近50年の北京語呼称語の変化について』(京都産業大学大学院外国語学研究科中国語学専攻、審査有、2013)の一部に結実させることができた。

1990年代の《編輯部故事》に現れる呼称語には主に六つの種類があり、(一)“老”と“小”、(二)姓名、(三)名、(四)職業名、(五)通称、(六)“零称谓”である。その内(五)の通称として“同志”、“师傅”、“先生”、“小姐”、“女士”などが使用されている。主に公共の場面で使う。例えば、レストランのスタッフは余徳利に“先生”と呼びかけている。

2000年代の《非诚勿扰》に現れる呼称語は主に五つの種類があり、(一)姓名、(二)名、(三)職業名、(四)通称、(五)“零称谓”である。その内(四)の通称として“同志”、“师傅”、“先生”、“小姐”は殆ど使われていなかった。姓+“先生”、姓+“小姐”の形式はまだ使うことができる。例えば、主人公の秦奮に“秦先生(秦さん)”と、既婚男性が呼びかける場面がある。

この50年間で、中国の家庭の構造にあまり変化がなく、親族呼称も変わっていない。一方、中国経済が急速に発展する中で企業の形式も種類も増え、それとともに社会呼称は急激な変化が発生している。

#### (2) 北京語の口語音声資料のデータベース 平成24年度

日中両国で大ヒットした最新BD版映画から30106字のデータを補充した。

#### 平成25年度

平成23-24年度に実施した最近25年の呼称語の変化に関する統計調査の反省を踏ま

えて、近15年の北京語口語音声資料を重点的に補充し、合計351962字のデータを追加した。

#### (3) インフォーマント調査

##### 平成24年度

軽読と巻舌韻尾に関する調査を3名の協力を得て実施した。3名の内訳は、山東省寿光方言、山東省煙台方言および北京市旧城内出身者である。調査方法は、現代漢語詞典から軽読の語彙リストおよび巻舌韻尾の語彙リストを作成して、各インフォーマントには語彙リストの全項目をチェックして各自の方言での表現に置き換えてもらい、その発音を録音(合計9時間)。

##### 平成25年度

軽読と巻舌韻尾に関するインフォーマント調査を北京市密雲県出身者の協力を得て実施(テキスト音読)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

#### 〔その他〕

##### ホームページ等

研究成果データベース  
非诚勿扰 など近15年の口語音声資料のヒアリングより文字入力した合計382068字  
インフォーマント調査データ  
北京市旧城内(1名)  
北京市密雲県(1名)  
山東省寿光方言(1名)

山東省煙台方言（1 名）

6．研究組織

(1)研究代表者

中川 千枝子 (NAKAGAWA, Chieko)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：2 0 1 7 2 2 7 3

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

吳 昊 (WU, Hao)

京都産業大学大学院・外国語学研究科修士

課程・平成 24 年度修了（文学修士）